

中国の若年ホワイトカラーを悩ます箸使い

岡山県上海事務所 小林和暁

(日中経済貿易センター上海事務所 所長)

箸使いの乱れ

箸の発祥地が中国であることは周知の事実です。しかし、その中国で今、若年層を中心に箸使いが乱れていることは意外と知られていません。昨今、インターネット上で“箸使い七大ポイント心得図”が注目を集めています。日本においても標準的な美しい箸の持ち方の7つのポイントを示した図ですが、これにより多くの若年中国人が、自身の箸使いが標準的でないことに気付きました。筆者が上海市内で観察したところ、中年以上の箸使いは概ね標準的で、1970年代生まれと思われる世代から一部標準的でない人が見受けられ、1980年代・1990年代生まれ世代と若年になるほど握り箸等のいわゆる“美しくない”箸使いが多い傾向にありました。あるインターネットニュースサイトが行った調査では、1386名のサンプル中、標準的な箸使いをしていたのはわずかに325名(23%)との結果も出ています。

箸使いの教育

中国では一般的に箸使い教育は家庭内で行われるものと理解されており、一部の幼稚園でしか日本のような箸使い教育は行われていません。幼児用品店でも日本で見られる練習用お箸のような補助用具は販売されておらず、あまり認知されていません。かつて家庭内でしっかりと行

われていた“箸使い教育”が経済発展に伴う社会構造の変化とともに衰退していったものと思われる。

中国の若年ホワイトカラーの箸使い

しかし、1970年代生まれ世代の経営者が多く現れ、1980年代生まれ世代でもビジネスでの会食に出席することが求められる時代となった今、その人物の知性の体現の一つともいえる箸使いが、中国の若年ホワイトカラーを悩ませています。インターネット上では“ご飯が食べられればそれで良い”“小さいころから父母に箸使いを指摘されてきたが、大きくなるにつれ言われなくなった”“幼少からの持ち方に慣れて、今更直せない”との意見も目立ちますが、一定の収入があり現代中国社会では“勝ち組”とも言えるホワイトカラーを中心に、“箸使い七大ポイント心得図”のインパクトは非常に大きかったようです。

今後、中国の若年ホワイトカラーの箸使いが改善されるか否かはさておき、既に1980年代生まれ世代が中国ビジネスの中核を担うようになり始めたことを示す一つのエピソードとも言えそうです。

(2014年5月)